

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 106 年)



〈観世宗家に伝わる華麗な能衣装の解説をされる二十六世家元観世清和氏〉
ナマステ・インディア 2009 文化講演会にて 佐伯健三氏撮影

目次

- 1. ナマステ・インディア 2009..... P. 3
- 2. インドニュース..... P. 6
- 3. イベント紹介..... P. 11
- 4. 新刊書紹介..... P. 13
- 5. 日印貿易概況..... P. 14
- 6. 掲示板..... P. 15

1. ナマステ・インディア 2009 Review of “NAMASTE INDIA 2009”

9月26日(土)、27日(日)の2日間、恒例のインド祭“ナマステ・インディア 2009”が、東京の代々木公園で開催されました。日本とインドの相互理解を深めるための文化交流イベントとして最大規模を誇るナマステ・インディアも、今年で17回目を迎えました。好天に恵まれ、年々深まる日本とインドとの関係の拡大を反映し、主催者側の発表では来場者数は最高の15万人に達したとのことです。



〈点火するシン大使(中央)と
カラン・シン会長(左)〉

26日(土)朝の開会式には、平林博当協会理事長が参列したほか、インド側からカラン・シン ICCR 会長(注)、シン駐日インド大使なども出席し、伝統の“プージャ”(オイルランプに点火して、ナマステ・インディアの成功を神様に祈る儀式)が行われ、正式に開催が宣言されました。



〈財団法人日印協会テントにて
事務局メンバー〉

代々木公園会場の当協会のテントでは、日印交流の歴史を記録した協会所蔵の貴重な写真パネルを展示し好評を博しました。ジャワハルラル・ネルー、インディラ・ガンディー、ラヴィンドラナート・タゴール、スバス・チャンドラ・ボース、ラス・ビハリ・ボースなどが写った写真の前で、多くのインド人が足を止め、懐かしそうに眺め、写真を指差しながら嬉しそうに語り合っていたのが、特に印象的でした。

今年は、テントの位置が実行委員会の配慮により、入り口に近い人の流れに沿った“大通り”に面していたこともあって、会員のみならず多くの方々も立寄って下さいました。テントに立寄り声をかけて下さった会員の皆様、ありがとうございます。

併行して、両日に亘り当協会と「たばこと塩の博物館」共催で行われた文化講演会も盛況に終始したのは、もう一つの喜びでした。講演の概要については以下をご覧ください。

(注)

ICCR: Indian Council for Cultural Relations(インド文化交流評議会) 海外との文化交流を担当するインド政府機関で、その長は閣僚級。カラン・シン会長は、ジャンム・カシミール州の最後のマハラジャであった、ハリー・シン氏のご令息。



〈代々木公園会場の賑わい〉

写真撮影: 佐伯健三氏(3枚とも)

〈文化講演会 内容紹介〉

◇9月26日 土曜日

①『インドの素晴らしさを考える』

講師：清 好延(せい・よしのぶ)氏

インド専門家、インド・アジア開発会社取締役



〈清 好延 氏〉

東京外国語大学でヒンディー語を学んで以来半世紀、通算 23 年に亘るインド駐在の体験を基にした興味深いお話を頂きました。

仏教と共に伝わった、サンスクリット語の音韻表からできたのが、現在でも我々が使用している「あ、い、う、え、お」の 50 音ですし、奈良の東大寺の大仏の開眼供養が菩提僊那(ぼだいせんな Bodhisena)という中国で活躍したインド人出身の僧侶でした。

更に、インド人が発見したゼロの概念、無・空の思想など、興味深いお話を紹介されました。同時に、多様なインド社会・文化は断片的な知識や情報から誤解されがちで、例えば「インド人は絶対牛肉は食べない」「インド人は名前でカーストが全て分かる」等々の所謂通説が必ずしも正確でない由です。

23 年間のインドでの体験の結晶である、清氏のホームページ“インド博物館長 (<http://www.indosay.jp/>)”、そして今年 7 月にダイヤモンド社から出版した『インド人とのつきあい方—インド人の常識とビジネスの奥義』を読むことをお薦め致します。

②『神々が選んだ国インド—面白すぎる超時空神話をたずねて』

講師：山田 真美(やまだ・まみ)氏

作家、日印芸術研究所言語センター長



〈山田 真美 氏〉

豊富な映像を駆使しつつ、軽快な語り口で 33 億(人?)といわれているヒンドゥーの神々の一端を紹介して下さいました。これまで耳にし、目にしたことのある神々の名前や姿が、矢継ぎ早に飛び出し、満場の聴衆は終始神々の世界に引き込まれていました。

日本の仏教がインド渡来であることは知られていますが、「〇〇天」とあるのは、元はと言えばヒンドゥー教の神々で、インドから渡来して仏教の守護神となったのです。ヒンドゥー教の三大神、すなわち宇宙の創造神ブラフマは梵天に、宇宙の維持神ヴィシュヌは毘沙門天に、宇宙の破壊神シヴァは大黒天となりました。ブラフマの妃神サラスヴァティーは弁才天、ヴィシュヌの妃神ラクシュミは吉祥天として受け入れられました。

山田真美氏の著作も是非ご一読下さい。詳細は、“<http://yamadamami.com>”でご覧になれます。

◇9月27日 日曜日

①『最近のインド映画事情・2009 年秋』 講師：松岡 環(まつおか・たまき)氏

アジア映画研究者



〈松岡 環 氏〉

今年も、最新映画のハイライト・シーンを取り出した映像を使いながら、インド映画の解説をしていただきました。

松岡さんのお話は、これまでと同様、すべての聴衆をしばしインドの地へと誘い込みます。スクリーンに映し出された映画の背景や、出演スターにまつわる話など、大変興味深く、満場の参加者は魅了されていました。

最近のインド映画界の変化として、ライバルであるハリウッドとの軋轢、シネマ・コンプレックスとの攻防、海外が舞台の作品の増加、新人監督の活躍などが指摘されました。

因みに、昨年のインド映画制作本数は史上最高の 1321 本(日本 418)で、言語別ではテルグ語(285)、ヒンディー語(248)、タミル語(175)、・・・と続きますが、最近の特徴として「歌・踊り・活劇」が入り混じった娯楽的作品に代わって、“真面目な”作品が登場しているとのこと。

最後に、これもまた恒例ですが、ポスターやカードなどのおみやげが参加者に配られ、講演会が一層盛り上がりました。

②『能役者がインドにみたもの』

講師：観世 清和(かんぜ・きよかず)氏

能楽観世流 二十六世家元



〈観世 清和 氏〉

能楽観世流二十六世家元である観世清和氏は、観阿弥を初世、世阿弥を二世として、二十六世まで続く観世流を統率する方です。

「インドでは、1987年・1992年・2007年と3回の公演を行っています。その時、インドの四大舞踊のひとつであるカタカリを見て、非常に感銘を受けました。カタカリは、能の源流とも言われていますが、自分としてはそうではないと考えています。

カタカリの特徴的な顔の隈取メイクに、3時間もかけていることを知りました。能はメイクこそしませんが、舞台に立つに当たり3時間前には楽屋に入り、舞台に向かうので、表には見えない部分にこそ膨大なエネルギーを注ぐことに、共通点を見ました。

また、テーマも『愛・恋・親が子を思う心』などで、能の世界にも通じる、人間にとって普遍的なものを扱っています。

インドでは、人々の優しさに心を打たれました。一方、じいっとこちらを見つめる人々に驚きもしました」と、インドでの思い出を語られました。

講演会では、映像を駆使しながらユーモアを交えて能について説明して下さり、参加者の目と耳を終始惹きつけて止まないものでした。

映像で、5歳のご子息に稽古をつける際、親子で向き合って「よろしく願いいたします」「はい」と言って稽古を始め、終わった後は「ありがとうございました」と挨拶する姿は印象的でした。日本の伝統的な「礼儀・作法」の原点であり、現代の日本人にも通じる言葉として、当日参加された方々の胸に強く印象に残ったものと思います。

終盤で、会場の皆様に対しおめでたい謡(うたい)「老松」のお稽古をしてくださいましたが、全員、頭骨に響くほどの大きな声を出して楽しんでいました。

参加者がお能に、一層の親しみと興味をおぼえたのは間違いありません。

2日間、計4回の講演に、多くの方が足を運んで下さいました。いずれも好評のうちに終えることができました。講師を引き受けて下さった4名の方々に、改めて感謝申し上げます。

2. インドニュース 9月 News from India

1. 内政

9月1日

- タイムス・オブ・インディア紙は、ムンバイのスラム人口が市全体の54%にも上る旨報道。

9月2日

- レディー・アンドラ・プラデシュ州首相が、ヘリコプターの墜落事故により死亡。
- 旗艦プログラムや象徴的プロジェクト等18の案件をモニターする実施状況モニタリング組織(DMU: 7月に首相府内に設置)は、シン首相に進捗状況を報告。
- ヒンドゥスタン・タイムズ紙は、ラフル・ガンディー議員(कांग्रेस党幹事長)が要望していたブンデルカンド地域開発のための特別予算として、インド首相府が3,000億ルピーの支出を承認した旨報道。

メモ:

ウッタル・プラデシュ州南部とマディヤ・プラデシュ州北部にまたがるブンデルカンド地域には、かつてはブンデル藩王国が存在していたことから潜在的に「ブンデルカンド州」設置の要望がある。当該地域は農業以外にめぼしい産業がなく、多くの住民が貧しい状況下におかれているが、居住者は約5,000万人に上るため選挙の際の影響力が大きい。 कांग्रेस党及び大衆社会党の双方がブンデルカンド地域の開発を巡って主導権争いが行われていたが、 कांग्रेस党が大衆社会党との主導権争いをリードする形となった。

9月8日

- インド政府は、「国際識字デー」(9月8日)の日に、非識字女性の減少を目的とした5年間の計画である「インド識字ミッション」を立ち上げた。

9月12日

- ジャンムー・カシミール州の州都スリナガルで、警察バスを狙った爆破テロが発生。警察官2名、一般女性1名の計3名が死亡、18名が負傷した。

9月14日

- 州警察本部長等が出席する全国警察幹部会議を開催(~16日)。チダンバラム内相は、州政府に武装警察の増員・強化等を求めたほか、州警察人事への州政府(政治家)の介入の阻止に取り組むよう指示。
- グジャラート州の7選挙区で補欠選挙を実施。結果はBJP5議席、 कांग्रेस党2議席。(選挙前はBJP1議席、 कांग्रेस党6議席)
- マディヤ・プラデシュ州の2選挙区で補欠選挙が実施され、 कांग्रेस党とBJPが1議席ずつ獲得。

9月16日

- 鉄道省は、鉄道プロジェクトに関していかなる強制的な土地収用も行わないことを決定。

9月18日

- ビハール州で18議席の補欠選挙を実施。同州与党ジャナタ・ダル統一派(JDU)は8議席減となり、州議会での議席数は83議席に。(過半数は243議席)
- ヒンドゥスタン・タイムズ紙は、IIT(インド工科大学)やIIM(インド経営大学)の増設に伴い、既存校も含め、深刻な教員不足を生じつつある旨報道。

9月20日

- 英字各紙は、インド共産党マオイスト派最高幹部の一人であるコバド・カンディがデリー警察に逮捕された旨報道。

9月24日

- カドゥカル印原子力委員会委員長は、インドは98年の核実験(ポカランⅡ)で科学的目標を達成し、約200キロトン程度までの爆発力を持つ原子爆弾及び水素爆弾を製造する能力を得た旨発表。

9月29日

- デリーで、インド原子力庁、IAEA、インド原子力学会の共催による「原子力の平和利用に関する国際会議」を開催。

メモ:

本会議にはエルバラダイ IAEA 事務局長が参加。シン首相は演説を行い、インドの原子力プログラムは、①重水炉及び関連燃料サイクル施設の設置、②高速増殖炉の設置、③改良型重水炉の設置及びトリウム燃料サイクルへの移行、という3段階からなり、現在は第2段階にある。原子力をうまく管理することができれば、2050年までに47万メガワットの発電能力を持ちうる旨表明した。(注: 報道によれば、47万メガワットは現在の100倍以上)

2. 経済

9月1日

- ヒンドゥ・ビジネス・ライン紙は、サカタインクス・インディアがグジャラート州バルーチ県パノリに印刷インク工場を建設した旨報道。

9月3日

- 英字各紙は、現代自動車が出州市場向け「i20」(ハッチバック型コンパクトカー)の製造拠点をチェンナイからトルコに移転することを決定した旨報道。

9月7日

- ムンバイ証券取引所(BSE)の主要30銘柄平均株価指数 SENSEX は、昨年6月2日以来15ヶ月振りの最高値となる終値16,016.32ポイントで取引を終了。
- ビジネス・スタンダード紙は、電気通信総局内に設置された委員会は、全ての電気通信事業免許保持者免許料について、年間総収入の8.5%とすることを勧告した旨報道。

9月8日

- フィナンシャル・エクスプレス紙は、2009年1月から7月のインドの小型車及びハッチバックの輸出は201,138台となり、同時期の中国の輸出台数164,800台を超過した旨報道。

9月9日

- インド最大の民間航空会社であるジェット・エアウェイズがストライキを決行。

9月10日

- ヒンドゥー紙は、国営の石油・天然ガス公社及びミッタル・インベストメント社は、カスピ海サトパエフ油田開発に関する合意をカザフスタン政府との間で近く締結する旨報道。
- インド政府は、インドへの外国直接投資を促進するため、印政府とインド商工会議所連盟及び州政府との合弁による「Invest India」社の設立を承認。

メモ：

Invest India 社の主な活動内容は以下の通り。

- ◆ インド進出に関心のある企業にとって最初のコンタクト先となる。
- ◆ 部門別のコンサルティング及び州政府との連携を行い、インドにおける事業設立の促進を行う。
- ◆ 投資しやすい環境を作るため、州政府レベルのキャパシティ・ビルディングを行う。
- ◆ 投資家の意識を大都市以外にも向けるための促進活動を行う。
- ◆ 投資促進プロジェクト、イベント、その他あらゆる投資促進関連活動に関して印商工省産業促進局(DIPP)及びその他省庁への支援を行う。

9月11日

- 気象庁は6月1日～9月9日までの長期降水量を発表。インド全体の長期降水量は平年と比べて20%少なく、36気象台中、21区が降水不足、13地区が標準、2区が超過となっており、特に北西部の降水は平年より34%少ない状況。

メモ：

- ◆ インドではモンスーンが6月から9月までに年間の7割の降水をもたらすが、今年は、9月11日までに全国623地区のうち、中央、西部、北西部の12州の299地区が干ばつ又は干ばつ状態を宣言。
- ◆ インドでは全耕地面積の60%以上を天水に依存しており、今回の降雨不足が米等のカリフ作(夏作)に影響を及ぼしており、不足の懸念から、米、小麦、キマメ、砂糖といった主要食料価格は9月12日現在昨年より平均65%高くなっている。

9月17日

- 英字各紙は、インド政府が2010年4月に導入予定の商品サービス税(GST)に関し、各州政府が州レベルのGST税率を標準税率と低減税率の二本立てとすることに合意した旨報道。

9月18日

- 英字各紙は、9月第1週(8月30日～9月5日)の卸売物価指数(WPI)によるインフレ率がプラス0.12%となり、約3ヶ月ぶりにプラスの増加となった旨報道。

9月26日

- エア・インディアの幹部パイロットが、生産性連動賞与のカットを巡り扇動(アジテーション)を実施(30日まで継続)。

3. 外交

9月3日

- ロシア訪問中のパティル大統領はメドヴェージェフ大統領と会談。
- ヒンドゥー紙は、訪印中のギラード豪副首相がチェンナイで、インドがNPT(核不拡散条約)に署名しない限りウランを供給しないと発言した旨報道。

9月6日

- パティル大統領は6日より2日間タジキスタンを訪問。中央アジアの旧ソ連内共和国へのインド国家元首の訪問は初。
- 中国へ向かう途中に給油のためコルカタの国際空港に着陸したアラブ首長国連邦(UAE)の軍用機を無許可で武器を積載しているとして空港当局が拘束。UAE側が「技術的なミス」による申告漏れに対し遺憾の意を表明したことから、同軍用機は10日に解放。

9月8日

- チダンバラム内相が訪米(～12日)。米国のテロ対策機関の視察等を実施。

9月13日

- モンゴルのエルベグドルジ大統領が国賓として訪印。包括的パートナーシップに関する共同宣言を発出。

メモ:

エルベグドルジ大統領は訪印中に、「放射性鉱物及び原子力の平和利用の分野における協力に関する覚書」等5件の協定及び覚書に署名。インドが原子力協力に関する覚書に署名したのは、米、仏、露、カザフスタン、ナミビアに続き6カ国目。インディアン・エクスプレス紙は、印国内産ウランだけでは原子炉の発電能力の半分しか活用できず、カナダやオーストラリアといった豊富なウラン産出量を誇る国は国内的制約からインドと協力を行っていないために、ウラン資源を売却する可能性のあるあらゆる国に対し接近していると指摘。

9月14日

- 英字各紙は、印中国境係争地域における中国軍のインド側への進入事案が増加している旨報道。

メモ:

8月から9月にかけて、印中西部国境付近での中国軍ヘリによるインド領空への侵入や、ジャンムー・カシミール州ラダック地区での中国軍の侵入、シッキム州でインド・チベット国境部隊と中国軍との間での銃撃戦の発生等、インドのメディアが印中国境地域における中国軍の侵入事案を盛んに報道。これに対してはシン首相が何ら深刻な事態は起こっていないと述べるとともに印中両国とも事態の沈静化をはかる発言を行っている。

9月15日

- エイジアン・エイジ紙は、10月中旬にアントニー国防大臣がロシアを訪問する可能性がある旨報道。

9月16日

- クリシュナ外相はベラルーシを訪問。スポーツ分野における協力に関する協定やミンスク・ハイテクノロジー・パーク内におけるデジタル教育センターの設立に関する覚書に署名。

- タルール閣外相は、リベリア及びガーナを訪問(～21日)。

9月18日

- クリシュナ外相がトルクメニスタンを訪問。トルクメニスタン～アフガニスタン～パキスタン～インドを結ぶパイプライン構想(TAPIプロジェクト)等につき協議。

9月22日

- インド、中国、ブラジル、メキシコ、南アフリカの5カ国は第64回国連総会の機会に、G5外相会合を開催。G8ラクイラ・サミットの際のG5首脳会合における合意事項のフォローアップやG20サミットの観点に関するレビューを実施。

9月24日

- シン首相がG20ピッツバーグ・サミットに出席。

9月27日

- クリシュナ外相とクレシー外相は、ニューヨークで国連総会の機会に印パ外相会談を実施。

4. 日印関係

8月25日

- 鳩山総理はG20ピッツバーグ・サミットの機会にシン首相と会談。

今月の注目点「インドの積極的な原子力政策」

インドは急増するエネルギー需要と気候変動問題への対応という両方の側面から、民生用原子力の活用を積極的に推進している。7月のクリントン国務長官訪印時に、米企業が2カ所の原子力発電所をインドに建設することが明らかにされたほか、今月のパティル大統領訪印時には、年内に4基の原子炉の建設契約が署名される見通しである旨の報道があった。また、原料のウランについても、今月モンゴルの大統領が訪印した際に放射性鉱物に関する覚書を締結するなど、資源の確保の面からも活発に活動している。更に今月末にはデリーで原子力の平和利用に関する国際会議を開催し、その際シン首相は2050年までに現在の100倍以上にもなる47万メガワットを目指すことも表明しており、今後ともインドによる積極的な民生用原子力の推進及び各国によるインドの原子力ビジネスの活発化が予想される。

<インドニュース執筆者の交代>

インドニュース欄は、8月分から外務省南西アジア課の加茂野亮介氏に執筆して頂いております。

加茂野 亮介(かもの・りょうすけ)氏 略歴

1994年4月 外務省入省

スリランカにて研修

在スリランカ大使館勤務

北米局日米安全保障条約課日米地位協定室

アジア大洋州局南西アジア課

内閣官房へ出向(総理大臣秘書官付)

国際協力局無償資金・技術協力課

2009年5月 アジア大洋州局南部アジア部南西アジア課勤務

3. イベント紹介 Information

<出席しました>

◇「ワイルド・シルク・フェスタ」開催

「呼吸するシルク」と謳った、ワイルド・シルク協議会（今泉雅勝理事長・当協会会員）主催の“ワイルド・シルク・フェスタ第3章”が、9月16日から27日まで、世田谷区用賀の『東京農業大学「食と農」の博物館』で開催されました。

16日のオープニングには、当協会の原常務理事が参加しました。東京農業大学教授で協議会副理事長の田所忠弘氏が開会宣言、続いて博物館の梅室英夫副館長、大学の高野克己副学長、日本野蚕学会の赤井弘会長などの来賓の方々の祝辞が続き、テープ・カットが行われました。（写真参照）

同フェスタは今年で3回目となりますが、来年秋には同じく東京農業大学で世界野蚕学会の総会も予定されています。今年は、世界有数の野蚕生産国であるインドに因み、16、17両日をインド・ナショナル・デーとして、インド大使館科学技術部の Thadathil Pankajakshan 参事官も参列しました。

期間中は、野蚕に関する学術講演や加工や染色の紹介が行われ、製品が会場一杯に展示されました。自然の恵みである貴重な野蚕に、多くの入場者が魅入られていました。



<テープ・カット
左から3人目原常務理事>

鹿子木理事撮影

◇第140回マハトマ・ガンディー生誕記念式

10月2日金曜日、九段下のインド大使館講堂で、第140回マハトマ・ガンディー生誕記念式が行われ、当協会から青山事務局長が出席しました。

インド大使館からは、シン大使夫妻、バッタチャリア公使、トリパティ文化広報担当書記官らが出席し、来賓として長弘毅（ながこうき）社団法人日印サルボダヤ交友会会長、ショーバナ・ラーダクリシュナ女史（インド世界青年の船同窓会会長）が出席しました。

シン大使は、挨拶の中で「マハトマ・ガンディーは20世紀の最も重要な人物であり、現代こそ、ガンディーの精神が必要なときである。ガンディーは、インドの国父といわれているが、自らは権力を求めず、人々に権力を与えた人物である」と述べていました。

講話や記念講演を行い、ガンディーの功績を讃えました。

講堂の舞台正面には、ガンディーが微笑む大型の写真が掲げられ、参列者はインド独立の父の生涯に思いをはせました。



<インド人学校児童による讃歌>

なお、ガンディーの誕生日に因んで10月2日は「国連非暴力デー」に指定されています。

<開催されます>

◆東京ディワリ フェスタ 西葛西

インドの多くの人々にとっては一大イベントであり、沢山の灯明に火が点され「光の祭り」とも呼ばれる、ディワリの季節がやってきました。そんな素敵なディワリに、日本に居ながらにして参加できます。

日 時：2009年10月31日(土) 10:00～18:00
場 所：新田6号公園 東京都江戸川区西葛西8-6
詳 細：<http://www.event-navi.ne.jp>
問合先：ディワリ フェスタ西葛西実行委員会 TEL 03-3688-6612
入 場：無料

◆サントウル・インスピレーション

小室真里さんによるサントウル(百弦琴)とムンバイで活躍中のタブラ(太鼓)奏者との共演です。ラーガ(インド古典音楽の旋律)をお楽しみ下さい。

日 時：2009年10月21日(水) 18:45開場/19:00開演
場 所：愛知県芸術劇場 愛知県名古屋市東区東桜1-13-2
詳 細：<http://ameblo.jp/santoor100mari/>
問合先：サントウル・インスピレーション事務局 TEL 0567-24-4421
入 場：当日3,500円(前売3,000円)

◆詩画集出版記念シーター・ロイ遺作展—日印文化融合のマイルストーン

約20年間を日本で過ごしたシーター・ロイさんの遺作展が行われます。『日本における我が家にて』と題する詩画集の発表にあわせて開かれものです。

日 時：2009年10月31日(土)・11月1日(日) 11:00～19:00
場 所：インド大使館文化センター 東京都千代田区九段南2-2-11
問合先：催しもの組織委員会 TEL/FAX 03-3452-3619
入 場：無料

◆THE FOURTH MOTHER GANGA EXHIBITION OF OIL PAINTING BY TATSUKO HIRAOKA

平岡達子さんの油彩画展が、「母なるガンガ」をテーマに、京都とニューデリーで開催されます。

✚ アートライフみつはし

日時：2009年11月10(火)～15日(日) 12:00～19:00(最終日は17:00まで)
場所：〒606-8407 京都市左京区銀閣寺前町23 TEL/FAX 075-752-3814

✚ TENSHIN OKAKURA GALLERY OF THE JAPAN FOUNDATION, NEW DELHI

日時：1(Mon)～6(Sat)Mar. 2010 11:00～19:00
場所：5-A Ring Road, Lajpat Nagar-IV, New Delhi 110024, INDIA
TEL +91-11-26442967/FAX +91-11-26442969

◆音文化による日印交流の展望 <様々なインド> 第23回開催のお知らせ

2009年12月9日水曜日 18:00～19:30、TM Hoffman氏を講師に迎えて協会事務所にて行います。詳細のご案内と参加申込用紙は次号を予定しております。

4. 新刊書紹介 Book review

§ 『インド科学の父 ボース—無線・植物・生命』



著者：パトリック・ゲデス / 訳者：新戸 雅章（しんど・まさあき）

発行：工作舎

定価：2,800 円＋税（ISBN 978-4-87502-420-0）

インド独立運動のために日本との協力を策したスバス・チャンドラ・ボースと、ラス・ビハリ・ボース以外に、「科学者のボース」の存在を知っている方は、インド通を自認する方々の中にも少ないのではないのでしょうか。本書は、科学者“ジャガディス・チャンドラ・ボース”の生い立ちと、研究の成果を紹介したもので、大変興味深い内容が目白押しです。

例えば、「植物はどこで重力を感知するか」「無線に対する反応」「アルコールでも水でも酔っ払う」「植物に体罰は有用か?」「植物の睡眠と覚醒」「過保護は生命をスポイルする」等々の目次が並んでいます。

「ボースは卓越した科学研究を残している最初の現代インド人であり、彼の伝記は外国の現代科学者の興味をたちまちかきたて、同国人を鼓舞し、勇気をもたらした」(著者序文より)ほどです。

旧ユーゴ出身の発明家、ニコラ・テスラと相前後して、無線装置を発明した「科学者のボース」の存在を知る好著です。

〈蔵書のお知らせ〉

中村元氏(なかむら・はじめ 帝京大学理工学部助教授)から、同氏の「スバス・チャンドラ・ボース、その生死の謎」と題する論文を頂戴しました。

イギリスからの独立を勝ち取るために、第二次世界大戦中日本軍と協力し、東南アジアでインド国民軍を率いたスバス・チャンドラ・ボースの死は、謎に包まれています。

昭和 20 年 8 月 18 日、台湾で飛行機事故により死亡し同地で火葬に付され、遺骨は杉並区の蓮光寺に安置されています。インドでは、飛行機事故で亡くなったという政府の公式見解がありますが、一方では、飛行機事故は偽装であり、旧ソヴィエト・ロシアに脱出したのではないかとの見方もあり、インド政府は 3 回に亘り、調査団を派遣した経緯があります。

この論文は、3 回の調査団の報告書を紹介しています。ご関心のある方は、当協会事務所をご覧ください。

* 『帝京大学理工学部 研究年報 人文編 第 13 号』 2006 年 12 月 25 日

発行：帝京大学理工学部内 佐藤研究室

* 『帝京大学宇都宮キャンパス 研究年報 人文編 第 14 号』 2008 年 6 月 30 日

発行：帝京大学宇都宮キャンパス 総合基礎

5. 日印貿易概況 (2009年第2四半期-前年との比較)

Trade statistics between Japan & India (April-June 2009)

※ 前期に引き続き輸出も輸入も大幅に減少 ※

(単位：100万円)

輸 出 総 額 (日本 → インド)	2008年4～6月 第2・四半期	2009年4～6月 第2・四半期	輸 入 総 額 (インド → 日本)	2008年4～6月 第2・四半期	2009年4～6月 第2・四半期
	226,000	143,702		139,578	88,974
食 料 品	81	79	食 料 品	26,239	12,186
原 料 品	2,963	2,592	魚介類	8,651	5,014
鉱 物 性 燃 料	29,497	6,003	(えび)	3,660	3,405
化 学 製 品	19,194	17,605	肉 類	-	0
有機化合物	7,739	6,386	穀物類	57	57
医薬品	506	395	野菜	33	33
プラスチック	5,189	5,199	果実	1,158	881
原 料 別 製 品	34,929	34,177	原 料 品	31,325	24,359
鉄鋼	23,149	19,317	木材	39	22
非鉄金属	1,351	948	非鉄金属鉱	2,711	1,606
金属製品	4,562	7,502	鉄鉱石	19,667	18,543
織物用糸・繊維製品	1,739	1,762	大豆	-	0
非金属鉱物製品	1,531	2,379	鉱 物 性 燃 料	17,350	19,569
ゴム製品	1,899	1,797	原油及び粗油	-	0
紙類・紙製品	688	467	石油製品	17,023	19,568
一 般 機 械	78,529	32,672	(揮発油等)	17,022	19,568
原動機	9,178	5,903	石炭	327	0
電算機類(含周辺機器)	528	261	化 学 製 品	10,949	8,522
電算機類の部分品	293	981	有機化合物	5,984	5,136
金属加工機械	20,226	4,447	医薬品	776	743
ポンプ・遠心分離器	9,780	3,446	原 料 別 製 品	33,560	11,515
建設用・鉱山用機械	5,493	2,253	鉄鋼原料製品	13,637	1,620
荷役機械	4,532	2,403	非鉄金属	5,651	188
加熱用・冷却用機器	2,948	1,611	金属製品	551	349
繊維機械	3,419	1,361	織物用糸・繊維製品	4,207	2,885
ベアリング	1,095	710	ダイヤモンド加工品	8,365	5,655
電 気 機 器	33,718	25,730	貴石及び半貴石加工品	245	140
半導体等電子部品	6,900	4,269	その他非金属鉱物製品	490	376
(I C)	4,376	2,833	木製品等(除家具)	38	30
映像機器	1,687	616	一 般 機 械	4,011	1,961
(映像記録・再生機器)	1,613	508	原動機	533	257
(テレビ受像機)	74	108	電算機類(含周辺機器)	123	40
音響機器	6	42	電算機類の部分品	595	499
音響・映像機器の部分品	32	92	電 気 機 器	4,914	1,925
重電機器	2,994	2,415	半導体等電子部品	91	28
通信機	4,606	5,269	(I C)	67	19
電気計測機器	4,643	3,455	音響映像機器(含部品)	14	26
電気回路等の機器	4,587	3,758	(映像記録・再生機器)	1	7
電池	150	85	重電機器	2,840	748
輸 送 用 機 器	13,840	11,239	通信機	17	23
自動車	3,310	1,051	電気計測機器	101	88
(乗用車)	3,244	1,046	輸送用機器	1,231	510
(バス・トラック)	67	6	自動車	318	155
自動車の部分品	9,857	8,625	自動車の部分品	827	316
二輪自動車	56	14	航空機類	-	5
船舶	-	0	そ の 他	8,999	8,697
そ の 他	13,251	13,606	科学光学機器	126	112
科学光学機器	4,008	5,366	衣類・同付属品	6,319	5,682
写真用・映画用材料	1,761	1,668	家具	49	52
記録媒体(含記録済)	959	1,390	バッグ類	389	404

0は表示単位に満たないもの -はデータの無いもの

資料：(財)日本関税協会『外国貿易概況』『日本貿易月表』

6. 掲示板 Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回の発送は11月13日(金)を予定しております。

インドに関係のある催事のチラシなどを会報に封入しませんか? 封入作業に参加する方は、会員でなくても構いません。お互いの情報を交換しながらの和やかな雰囲気での作業です。

〈お知らせ〉

10月1日に当協会季刊誌「現代インド・フォーラム 第3号」をホームページにアップ致しました。“インドのエネルギー事情と地球環境問題”は非常にタイムリーな特集との評価を、各方面から頂いております。最新号は、どなたでもご覧になれるので、非会員の方でも興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非当協会のホームページをご覧になるようお勧めください。

創刊号・第2号をご覧になる場合は協会会員用のパスワードが必要です。会員で協会からのお知らせが届いていない方は、お手数ですが事務局までお問い合わせ下さい。

また、ホームページでは皆様の提言を受け付けております。皆様からのご投稿による談論風発を期待しております。

〈編集後記〉

10月3日に鈴鹿で開催されたF1に、チーム国籍がインドのフォース・インディアが参戦しました。ドライバーはドイツ人とイタリア人ですが、そのうちインドのドライバーが活躍するようになるかもしれません。恐るべしインド・パワー!

本号のイベント紹介欄でもいくつかお知らせしておりますが、今月はインド関連の催事が多くあります。皆様もお出かけになつては如何でしょうか? インド・パワーに触れると、元気がでます。



日印親善のために会員の輪を広げましょう



法人会員・個人会員の入会をお待ちしております。

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係をより一層深めるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人 6,000円/口
学生 3,000円/口
一般法人会員 100,000円/口
維持法人会員 150,000円/口

☆入会金：個人 2,000円
学生 1,000円
法人 5,000円
(一般法人・維持法人会員共)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.106 No.8 (2009年10月16日発行) 発行者 平林博 編集者 青山 鑛一
発行所 財団法人日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>